

『御曹司は恋に惑う』

著：遠野春日

ill：雪舟 薫

擦れ違うのもやっとなという山道を二時間あまり運転してきて、ようやく辿り着いた雄馬の別荘は、予想していたよりも立派なものだった。

「こんな場所に、よくもまあ……」

坂道の下に車を止め、二階建ての木造建築を振り仰いだ奨は、疲れの滲(にじ)んだ声で呟(つぶや)いた。

なるほどとてつもない山奥にある別荘だが、深い緑を背景に佇(たたず)むロジッふうの外観はまんざら住み心地が悪いようでもない。日に灼けて味わい深く色褪せた赤い屋根と焦げ茶色の木の壁が印象的だった。

車から降りて坂を上っていくと、狭い前庭が現れる。

庭にはサルビアやダリア、マリーゴールドなど、園芸に興味のない奨にすらわかる草花がきちんと手入れされて咲いている。午後から強さを増してきた風に翩(なぶ)られ、ゆさゆさと花弁を揺らしつつ健(けな)気(げ)に立っていた。

そんな花々を眺(なが)めやり、意外にこまめで繊細な男だったんだなと奨は感心した。同時に、本当に雄馬のことを自分はほとんど知らないのだと噛み締める。こんな甥(おい)が死ぬ直前まで暮らしていた大事な家を受け継ぐのかと思うと、雄馬もさぞかし不本意だろう。今頃空の上で悔しがっているかもしれない。

別荘の鍵は弁護士から受け取っていた。

それを使って玄関の扉を開こうとしたが、開けたつもりが施錠してしまったらしく、奨は眉を顰(ひそ)めた。扉は最初から開いていたようだ。

「どういうことだ」

早速空き巣にでも入られたのか。それとも管理人が閉め忘れたのか。

後者ならば管理人の怠(たい)慢(まん)を嚴重に注意しなければ、と不機嫌になりながら勢いよくドアを開けた。

「誰か！ 誰かいるのか！」

万一不審者が入り込んでいては身の危険が生じる。奨は戸口に立ったまま奥に向かって大声を上げた。

それに応えるように、トントンと階段を下りてくる軽い足音が聞こえてきた。

まさか。誰もいないはずだ。

奨の背中に緊張が走る。思わずあたりに視線を彷徨(さまよ)わせ、何か武器になりそうな物はないかと探していた。

階段の中ほどから下は玄関からも見えている。

そこに現れたのは、予想外に、裾の長いスカートを穿(は)いた女性だった。すらりとした長身にくっきりとした目鼻立ちの、非常に印象的な美人だ。肩のあたりまで伸ばされた淡い茶髪が色白の顔を縁取っていて、黒々とした大きな瞳の目が際立つ。化粧っけはなくとも、はっとするほど整った容貌に恵まれている。いわゆる中性的な美貌だ。

「……誰？」

最後の段に足を載せたまま、奨の与(あずか)り知らぬ侵入者は無感情な目を向け
てくる。

「それはこっちの聞くことだ」

奨は夢でも見ている心地になりながら言い返した。

「いったいなんなのだ、この我が物顔の女は……。状況の不可解さ、不意を衝かれた
驚きで頭の中はいっぱいだ。」

「ああ」

急に何事か思い至ったかのように女は目を眇(すが)めた。

「もしかすると、あんたが雄馬さんの甥？」

綺麗な顔に似合わぬぶっきらぼうな口の利き方だ。

奨は違和感と不快感を覚え、ますます表情を陰しくした。

「たぶん年下だろうと思える相手から不(ふ)遜(そん)な態度で接されるのは許容でき
ない。まして相手は本来ここにはならないはずの、いるはずのない侵入者だ。少
なくとも目下のところ奨の認識ではそうだった。弁護士からは何も聞いていない。――
それとも、彼がなんともバツの悪そうな、妙な顔つきをしていたのは、この女のせいだ
ったのだろうか。」

「きみは？ もしや、叔父と一緒にここで暮らしていたのか？」

さすがに愛人かとは面と向かって聞けず、奨は言葉を選んで問い質(ただ)した。

「まあね」

「悪びれるでもなく肯定した女は最後の一段を下り、びっくりするようながさつきでスカ
ートをたくし上げ、ずんずんと奨の前まで歩み寄ってきた。まったく遠慮する様子もな
い。」

むしろ奨のほうが気圧されかけ、思わず身構えそうになった。

「玄関先の壁に無造作に片手を突いて奨と向き合った女は、生意気にクイと顎(あご)
をしゃくった。」

「上がったら」

「なんできみにそんなふうには威張られないといけないんだ！」

女の態度があまりにも横柄だったので、奨はムツとして口調を荒げた。

「叔父とどんな関係だったのかは知らないが、ここは今後俺の管理下になる物件だ。
悪いがきみの勝手にはさせないぞ」

「おれがいつ勝手なことをした！」

カチンときたのは相手も同じだったらしい。

細めの眉が跳ね上がり、黒目がちな瞳に剣(けん)呑(のん)な色が浮かぶ。

「だが、奨は自分の言葉が相手を怒らせたこと以上に、「おれ」と言い放たれたことに
ギョツとしていた。」

「スカートを穿いているのでっきり女と思い込んでいたが、よくよく見ると、確かに男
にも見える。女性にしては声がハスキーだなどは感じていたものの、それ以上にはち
らりとも疑わなかったのが不思議なほどだ。スカートの上に身に着けた薄手のプルオ
ーバーには、胸の膨らみなどまるでない。緩やかな癖のある柔らかそうな髪に気を取
られて見過ごしていた喉の尖(とが)りも、間近で向き合うとくっきりしているのがわかる。」

「驚きに言葉を失った奨に、スカートを穿いた美貌の男は「ははん」と悟った顔つきに
なった。」

「もしかしておれのこと女と間違えてた？」

皮肉っぽくて意地の悪い問いかけだった。明らかに奨をばかにし、嘲(あざけ)っている。

こいつ……！

奨は恥を搔かされたきまりの悪さから、ますます男に反感を持った。

合わない。どう考えてもこの男とは気が合いそうにない。このこましゃくれた顔を一瞬でも綺麗だなどと思ったこと自体許し難くなるほど、奨は気分を害した。

「あいにくと俺の周りには今までスカート穿いた男はいなかったのね」

思い切り冷ややかに言い返す。

「しょうがないだろ」

それでも相手はしゃあしゃあとしていた。

「東(とう)京(きょう)はどうだったのか知らないけど、このへんは昨日までずっと雨続きだったんだ。今朝ようやく一時的に晴れ間が出たから溜め込んでた洗濯物を全部洗っちゃった。それが乾くまでの間、いくらおれでも裸ではいられないからな」

なるほど大まかな事情は呑み込めた。言われてみれば、ここに来るとき渡ってきた川の水がずいぶん嵩(かさ)を増していたのを思い出す。濁流が渦を巻いてゴウゴウと流れていくような音までしていた。その川に架かるいかにも年季の入った古い橋を渡るとき、まさか落ちやしないだろうな、流されでもしたら大変だぞと恐々としたものだ。雨続きと聞くと納得がいく。

「ここにはきみ以外にも誰がいるのか？」

「沢(さわ)辺(べ)森(もり)生(お)」

「え？」

唐突に名前だけ言われ、奨は面食らう。

「おれは沢辺森生っていうんだけど」

繰り返し名乗った男——いや、森生は、無愛想な顰(しか)めっ面のまま斜めに奨を見上げてくる。「きみ」などと呼ばれ続けるのは我慢できないとでも言いたげだ。

「いいだろう、森生」

奨は苦々しげに唇をひん曲げてみせ、あえて森生を名前のほうで呼び捨てにした。不愉快な相手にわざわざ「さん」付けなどしてやる気にはなれない。早くも二人は敵対心を抱いて対(たい)峙(じ)するような関係になりつつあった。お互い相手のことなどほとんど何も知らないうちからだ。よほど第一印象がよくなかったのだろう。

「俺の名は奨だ。阿久津奨」

「いかにもってカンジ」

「なんだって？」

「いかにもそういう気取った名前が似合いそうだなって思っただけ」

「……とことん嫌な言い方ばかりする男だな」

「そっちこそ」

スカート姿の森生はふんと軽く鼻を鳴らし、首を後ろに反らして奨から視線を外すと、腰のなさそうな髪をいささか乱暴に指で梳(す)き上げた。

本文 p22～29 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>